

# 折り鶴93トン 揺れる広島



ポリ袋に詰められ、山奥の倉庫で山積みになされている折り鶴。広島市安芸区矢野町、倉富写す

## 市民ら「保存」「焼却」「再生紙」

保存か焼却か、別の妙案はあるのか。平和への願いを込め、世界中から届く折り鶴の扱いに広島市が頭を悩ませている。焼却から保存へと前市長が方針を変えたため、1億1千万羽、重さで93トンの大半が、倉庫に山積みになれたままとなっているからだ。

「広島を訪れた人にお土産で渡す」「再生紙にする」「焼却する」「永久的に保存すべきだ」。折り鶴の扱いをどうするか市が今月1日から市民の意見を募り始めたところ、3週

間で約130件の様々な意見が寄せられたという。

折り鶴は、平和記念公園(同市中区)にある原爆の子の像に毎年、世界中から1千万羽以上、重さにして10ト以上が届く。公園内の展示ブースが満杯になると、古いものから順に市の倉庫に移される。運搬費用や人件費などで年間約400万円の経費がかかる。

「折り鶴論争」のきっかけは、秋葉忠利前市長が「懸命に鶴を折る子どもたちの気持ちを大切にしたい」と、02年度からそれまでの焼却処分をストップさせたことに始まる。

将来的に折り鶴の恒久保存施設をつくる構想もあったが、議会はコスト面などから反対し、前市長は今春引退。4月に初当選した松井一実市長は施設の建設を見送り、市民からアイデアを募って、今年度中に折り鶴の扱いを決めることにした。同じ被爆地の長崎市では、折り鶴を長崎原爆資料館に約1年間展示。写真を添えた礼状を贈り、順次、古紙回収に出している。

原爆の子の像のモデルになった佐々木禎子さんの兄、雅弘さん(69)は福岡県那珂川町は「贈った側の気持ちも大切にするためにも、折り鶴を再生し、何らかの形で発展途上国の子どもの役に立てては」と提案する。7月に松井市長と会い、考えを直接伝えるという。(倉富竜太)

### 原爆の子の像



2歳の時に広島市で被爆し、10年後に白血病で亡くなった佐々木禎子さん(当時12)の真、兄の雅弘さん提供。禎子さんは被爆後、も元気に暮らして

いたが、1955年2月に白血病と診断され、入院。その際、お見舞いの手紙がかなうと信じ、自分でも「元気がなりたい」と折り続けていたが、同年10月に亡くなった。募金活動は反響を呼び、寄付金で像が建立された。